

2019年度特別支援教育に関する実践研究充実事業  
 (新学習指導要領に向けた実践研究)  
 成果報告書(概要)

受託団体名
筑波大学

## 1. 研究の名称

新学習指導要領に示される聴覚障害の状態等に応じた言語活動の充実  
 ～人工内耳装用児に対する全国調査と実践研究に基づいて～

## 2. 研究代表者

氏 名	所 属	役 職
鄭 仁豪	筑波大学人間系	教授
	筑波大学附属聴覚特別支援学校	学校長

## 3. 事業の実績

## (1) 研究の目的・目標

<b>研究の目的</b>
本研究では、人工内耳装用の幼児児童生徒における言語活動の現状と課題、言語指導のための方法や工夫点、また、人工内耳装用幼児に対する具体的な指導法やその課題について、個々のニーズや特性に応じた教育実践を通して明らかにすることを目的とする。
<b>研究の目標</b>
<p>1. 全国実態調査（人工内耳装用児の言語活動の現状と課題を究明する）</p> <p>人工内耳装用幼児児童生徒の人工内耳装用の実態を把握するとともに、人工内耳装用幼児児童生徒の聴覚活用や言語活動（読み書き）の特徴とその指導の現状と課題、学習・生活場面での学業成績、学習態度、コミュニケーション能力、学校生活での行動に関する傾向と課題について明らかにする。</p> <p>2. 実践研究（人工内耳装用幼児に対する効果的な言語活動の取組について明らかにする）</p> <p>聴覚を活用した指導について共通理解を図り、言語習得期における聴覚を活用した指導の成果や課題、言語理解や言語表出を促すための様々な指導上の工夫を明らかにする。更に、人工内耳装用児のニーズや状態に応じた指導上の工夫と、日本語の獲得への影響や客観的なアセスメントに基づく指導法について検討する。</p>

## (2) 研究仮説

<p>1. 全国実態調査</p> <p>全国の特別支援学校（聴覚障害）、難聴特別支援学級及び難聴通級指導教室における人工内耳装用幼児児童生徒の言語活動の現状と共に、幼児児童生徒の特性やニーズに応じた言語指導の内容と工夫点等が究明できる。</p> <p>2. 実践研究</p> <p>特別支援学校（聴覚障害）幼稚部の人工内耳装用幼児に対する、聴覚を活用した指導方法とその課題等について、客観的なアセスメントと個に応じた指導に基づく結果から、効果的な言語活動に関する示唆が得られる。</p> <p>上述の実態調査及び実践研究により、人工内耳装用幼児児童生徒に対する充実した言語活動の在り方に関する示唆が得られる。</p>
--

### (3) 研究の実施内容

#### 1. 全国実態調査

全国の特別支援学校（聴覚障害）、難聴特別支援学級及び難聴通級指導教室に在籍・通級する幼児児童生徒を指導する教員を対象にアンケート調査を行い、各教育現場における人工内耳装用幼児児童生徒の実態、言語活動の現状と課題の把握を行った。

#### 2. 実践研究

「聴覚を活用した指導」に関して、主体的にみる・きく態度、音韻意識、人と関わろうとする力、言葉で考える力の大切さについて共通理解を図り、事例検討会を通して、幼児の日常の様子に関する情報の収集とその整理と課題の明確化、具体的な指導法の検討と今後の方向性の確認を行った。

### (4) 研究の成果

#### 1. 全国実態調査について

##### 1) 全国特別支援学校への依頼と回答状況

全国特別支援学校（聴覚障害）107校（本校95校、分校・分室12校）から、1,350人分（有効データ数は1,314人）が集められた。

##### 2) 難聴特別支援学校、言語障害特別支援学級ならびに通級指導教室への依頼と回答状況

全国の小学校及び中学校の277校から、人工内耳装用幼児児童生徒188人の回答が得られた。

##### 3) 調査の結果（概要）

今回の調査により、教員の教育歴や希望する研修の内容、幼児児童生徒の実態（受診時期、人工内耳装用開始時期、片耳装用、両耳装用、手術後の聴力、普段使用しているコミュニケーション・モード、学習時に使用しているコミュニケーション・モード、学校歴と進路希望、言語力（語彙力、言葉を聞き取る力、文法力、状況把握力、言語活動に関する意欲の程度）、学校での学習・生活（学習成績、学習態度、コミュニケーション能力、行動）等が明らかになった。

#### 2. 実践研究について

今年度、筑波大学附属聴覚特別支援学校幼稚部で行った実践研究は以下の通りである。

##### 1) 幼児の状態の客観的把握について

幼児の実態を客観的に把握するために、全体的な発達、きこえの程度、受聴態度、言語発達の程度、発音の状況といった評価内容により人工内耳装用幼児全員について実態把握を行った。

##### 2) 授業研究会による実践研究について

「聴覚を活用した言語指導」で大切になる事柄について分析し、「授業を振り返る視点」としてまとめた。それに基づく授業研究では授業場面を録画し、その後意見交換を行い、「聴覚を活用した言語指導」について検討を重ねた。ここでの意見等は記録票に整理した。

##### 3) 事例検討会による実践研究について

人工内耳装用幼児の個々人のニーズに応じた指導の在り方を検討するために、人工内耳装用幼児5人を対象に事例検討を行った。担任が幼児の実態と課題を話題提供し、全員で問題点や指導内容について認識を共有した。その上で具体的な指導法やつまづきの背景について分析し、その結果を実際の指導に反映した。

### (5) 研究の課題と今後の方策

今回の分析により、人工内耳装用による音や聴覚活用における肯定的な影響とともに、補聴器装用時において常に指摘されてきた言語発達の問題が、人工内耳装用においても同様の課題として示された。今回の分析は、データ全体を単純集計した結果に基づく検討に留まっている。学部間の変化や特徴や、記述式の意見に関する詳細な検討が人工内耳装用児の言語活動やその課題を見極めるには必要である。同様に、個人要因（装用時期、装用状態、コミュニケーション・モード）や言語活動と学校での学習と生活との関連についても、より詳細な分析が求められる。

実践研究では、次年度、幼児の実態把握と集積した授業研究や事例検討の記録を基に、人工内耳装用幼児の「聴覚を活用した言語指導」における配慮事項や個々人の言語発達を促す有効な指導法につ

いても検討を進める必要がある。